

国際光年記念式典挨拶

2015年4月21日
第23期日本学術会議会長 大西隆

国際光年記念式典に際して、主催者である日本学術会議を代表して、ご参集の皆様にお札を申し上げます。ご祝辞を頂戴します、文部科学省科学技術・学術政策局長川上伸昭様、東京大学総長五神真様、科学技術振興機構理事長中村道治様にお札を申し上げます。私どもは主催者ですが、実質的には、ICO 国際光学委員会の会長を務めておられる荒川泰彦先生を中心とした、国内の専門家の方々が、国際組織と連携して国際光年の日本における活動を準備してこられたのでありますから、こうして、盛大に記念式典が開催されますことを心からお祝い申し上げたいと存じます。

国連の光年は、国際連合（UN）総会第68会期（2013年12月20日）において、2015年を「光と光技術の国際年（IYL2015）」とすることが宣言されたことに由来します。国連のこの事業は、特に、世界が重点を置くべき問題に関して取組むことを全世界の団体・個人に呼びかけるために行われています。その意味では、今年のイベントを契機に、私たちの生活にまさに密接に関連する光について、人々の関心が深まり、基礎から応用、実用までの研究が大いに進み、それらの成果が社会に的確に還元されることを期待して止みません。

国連のこの催しは、1957年の国際地球観測年に始まったのですが、実は、この時に、日本学術会議も、我が国の諸観測機関の要請を踏まえて、積極的な参加を表明し、第2次世界大戦で途絶えていた科学研究における国際協力を復活させることができたのでした。その意味では、世界の科学者や人々に対する、光と光技術に関する国連の呼びかけが、まだ十分に光の恩恵に浴していない人々や、研究組織が十分に立ち上がっていない地域にとっては、とりわけ重要な意味を持ちうることを忘れてはならないと思います。今年を、単に我が国における光と光技術の一層の発展の契機とするだけではなく、特にこれからより本格的にこうした分野の研究に取りかかろうとする国々の科学者とも積極的に研究交流を図り、光と光技術の国際的な発展に寄与する活動も是非進めていくことが必要だと思います。

さて、私ども日本学術会議の活動について、少し触れさせて戴きます。私どもは、全国で84万人いる科学者・研究者を代表する国の機関です。といつても、他の機関とは異なり、まさに科学者が構成員になって作り上げている自律的で、独立した活動を行う組織です。

世界各国に、Science Academyと総称される同様の機関があります。それらの中で、日本学術会議の特色は、人文・社会科学、生命科学、理学・工学という科学の全分野をカバーしていることです。

我が国は、科学技術立国を国是とするといわれるよう、輸出するような天然資源が乏しい中で、科学を生かした技術によって原材料を加工して製品を作り出すことによって国を発展させてきました。光技術は数ある科学技術の中でも、日本人が最も得意とする分野の一つではないかと思います。その意味では、我が国の光技術が更なる飛躍を遂げて世界をリードするようになることを期待します。

光科学や光技術が発達することをポジティブにとらえない人はいないと思いますが、科学技術はその規模や効果が大きくなると、使い方が難しくなるという厄介な問題があります。我々は、4年前の福島原発事故で、科学技術の負の側面を目の当たりにして、人が科学技術を的確に管理していくことの重要さと難しさを実感しました。日本学術会議では、東日本大震災からの復興、とりわけ原発事故被災地の復興に積極的に関わり、今後も継続的に取組んでいきたいと考えています。この問題は、光の重要な利用形態の一つである照明を可能とするエネルギーをどのような方法で得るべきなのか、あるいはできるだけ少ないエネルギーで明るさを得るための光技術はどのようなものであるべきかを含んで論じられなければなりません。私達は、太陽の光をより直接的に利用するエネルギー供給を普及させたいと思っています。また同時に、本日基調講演をしていただく天野浩先生をはじめとする3人の科学者が、ノーベル物理学賞を受賞されることになった、青色LEDによる省エネ型照明も科学技術の安全で安心な利用を広げるものだと思います。このように、光科学や光技術が関わる領域でも、科学者がなすべきことは多いといわなければなりません。

日本学術会議は、それぞれの分野の専門的科学者が集まり、科学が人類に真に有用なものとなるためには、科学的発見の何を生かし、何を封ずるのかを論ずる、いわば科学と人間の接点に関心を置く組織でありたいと考えています。

国際光年に当たって、日本学術会議も、改めて、この分野における今後の科学的研究のあり方に議論の焦点を当てて、人類の未来に貢献する光科学・光技術を発展させていくことができればと思います。

国際光年活動の成功、そして本シンポジウムの成功を祈念して、私のご挨拶とさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。